
停

塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢

【Nコード】

N5980X

【作者名】

塩

【あらすじ】

神奈川県にあるここ私立麗杜学園。

県内の進学校でも、かなり名の知れた学校だ。

俺こと、軒下蠅螂のきしたとうろうもこの学園の生徒だ。

この学園でもっとも有名な生徒、生田搭真いくたとうま。

彼は容姿端麗、頭脳明晰、その他もろもろのステータスを持ち、さらに学園の理事長の一人息子。

だが彼には秘密があった。

それをふとしたことから知ってしまった俺は彼が持ちかけてきた恐

ろしい計画に、生返事してしまった。

はたして俺は安閑とした学生生活をおくれるのか。

椎名素一のデビュー作。

津田の編集済み。

1 完璧生徒の秘密

「はあ……」

俺は一つため息をつく。

今は五時限目、今日最後の授業。

よりもよって何で最後の授業が道德なんだよ。と、心の中で舌打ちしたり。

俺は、道德、体育、学活とかの、「じゃあ好きな人と組んで」とかが、嫌いだ。大嫌いだ。

キンコンカンコン

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「はい。明日は持ち物とかは特には無いから。んじゃバイバイ」
そう言って担任の谷本先生は、教室を出たがすぐ戻ってきて「軒下は、教室に残ってるよ」と言った。

遅くなったが俺の名前は、軒下 のました 蟪蛄こと言う。この名前みた俺の性格、雰囲気は暗い。

そのせいで俺は友達が出来ない。と、スペックを言おうとしてる間に教室には俺しかいなくなっていた。

先生も来ないし帰ろう、と思い鞆を担ぎ上げた瞬間。

ガラガラッ

と大きな音をたてて先生が教室に入ってきた。

「ごめんごめん、またせたね。」

ダッ（声が聞こえた瞬間ダッシュで逃げる音）

バツ（先生が退路をふさぐ音）

ドゴツ（先生にボデイブローをかました音）

「それじゃ先生また明日！」

まだ床でうずくまっっている先生の脇を走って逃げた。

「ハッ、ざまーねえ」と思いながら走っていると、閉まっているはずの教室に人影が見えた。

ん？今のは生田じゃないか？何でこんな所にいるんだ？と疑問に思いながらゴム質の上履きに急ブレーキを掛け、ドアにっいているガラスから中を覗く。

「くつくつく、面白かったなあー」

ん？生田ってこんな声だったけ

「くつ！また勝手に出てきたな！」

あれ、いつもの生田だ。

「いいじゃねえかよ。俺だっずっと中にいちゃ退屈だろう？」

また変わった。なんなんだ？

「くつ！勝手に出てくるなーーーーー！」

うおっ！何かやばくね、これって・・・

多重人格！？

考えるより早く、

ガラッ

「「!？」」

……やばいなんか見ちゃいけないものを見たような。

「初めから見てました？」

生田が俺に喋りかけてきたのだが……怖ええよ。
まず目が、笑ってない。

ここは素直に

「ななな何も、みみみ見ていませんから」

「それなら何で、後ずさっているんですか？」

声も低くなった。もう無理。ギブ

「見ました。すんません。」

言っただと同時に俺の意識は飛んでった。

右ひざへの負荷が減った

「んっ、ああ起きたのか」

ああ、ついに邪神が起きてしまった。どう答えよう。

「君はね、なぜか廊下で倒れて居たんだよ。それを見て僕が君をここまで運んできたんだよ。他に何か覚えてるかな？」

今の俺ならわかる。語尾に隠しきれない殺気がこもっていることが大丈夫だ。

「全然覚えてないで。」

……終わった。何もかも。

「それじゃあ、何で大阪弁になってるんだい？」
生田君、目が笑ってないよ。

「覚えてます。はい。」

「はあ……やっぱり覚えていたんだね」
あれ？意外とすんなり認めたな。何でだろう。さっきは俺を殺そうとしてまで記憶を消そうとしてたのに

「それじゃあ、もう日が暮れそうから僕は帰らせてもらっよ。」

「……」

そのまま生田は、ドアへと向かった。

途中、優雅に振り返り俺に向かってこう言った。

「明日、放課後屋上に来てくれ。まっているよ」
と言って去っていった。

「明日、休もうかな」

僕の言葉は誰もいない暗い校舎に消えていった

ジリリリリリリリリリリリリリ

ちっ、うるせえなあ。

声といえないほどの大きさで言い、目覚まし時計を止めた。

昨日は疲れて早く寝たはずなのに疲れが取れていないようだ。

「はあ、なんであんな事になったんだろ……」

そう、俺は昨日何もかも完璧な学園の有名な、生田搭真の秘密を知った。そして殴られた。殴られた所はまだ多少ズキズキする。

「はあ……まあ今更考えても遅いし仕方ないかあ」と考えながら制服を着る。我が麗杜学園の制服はブレザータイプで一着20万もする。俺の家は結構有名な名家で金持ちだ。

俺の性格が捻くれはじめたのは某ライトノベルを読んだ時に、その主人公の考え方に感銘を受けた時からだ。

その時から友達がいなくなったんだよな、と暗い思い出に浸りながら洗面所に向かうとそこには禮菟らいとがいた。

「おはよう」

「なんだ兄貴か（半笑）」

「何で半笑いなんだよ」

「兄貴だから」

会話から分かるように俺の弟は小生意気だ。

生田搭真を小生意気にしてオタク要素を入れたようなほぼ完璧人間だ。

「じゃあ俺はもうでるから、バイバイ」と言って朝練に出かけて行った弟を見送り、俺も朝食を食べ家を出る。

「ふう……」

今は、6限目。今日最後の授業。

何故、溜め息をついたかというと、我がクラス担任兼国語担当の教師谷本の、報復にあっているからだ。

昨日、鳩尾みぞおちを殴って逃げたのをまだ根に持っていたらしく、授業中難癖つけて俺を指名した。

授業が予定より早く終わり、一班になって議論する時間（スーパー報復タイム）になった。

議題は「ノストラダムスの予言」について。

谷本がニコニコしながら近づいてきたのでおもいきり睨みつけたら「ほら、お前も混ざって意見を出せ」と言われたので

「ピーーーーーー（放送コードとかに引っかけたので自粛）！」

スパーンッ

いすから転げ落ちるほどの強さで叩かれた

キンコンカンコン

谷本は「よし、チャイムが鳴ったので解散」と適当に言って去っていった。

一いつか仕返し（仕返しの仕返し）してやると思いながら鞆の中に筆箱を入れ、生田搭真との待ち合わせ場所の屋上へと向かった。

俺が屋上に来てざっと45分。

自分から言っというて45分も待たせるとは。

はあ、眠くなってきたしもう帰るかあ、と鞆にラノベを入れたときパリンッという音とともに生田搭真が息切らして走ってきた。

眠くなってた俺は座って隣の床をたたいた。

「やあ、ごめんごめん待たせたな」

人が「ここに座れ」とやったのに無視か。

「ん」

「でさ話っていうのはさ」の部活を作って真の友達を作ろうって話。名目はボランティア部だ。君も入ってくれないかい？」
欠伸で聞こえなかったところがあるが……まあいいだろ

「ん」

「本当かい！それじゃあ僕が部長で、君が副部長だ！それじゃあ申請してくる！」

あゝ、いっちゃった。すげー速さで去っていったなと思いつつその日は帰った……

が、俺は何も考えずに返事したことを後悔する事になるのだった。

「はぁ・・・」

今日も俺は溜め息をついている。

溜め息をついている理由は今の状況にある。

俺は今、麗杜学園特別棟四階空き教室にある、「部室」、に來ている。

何でこんな状況ことになってしまったのだろう。

今日帰り学活が終わり教室を出ると生田が『営業スマイル』振りまいて、

「蠅螂くん、ちょっと」

とって、僕を拉致った。

昨日生田がハイテンションだったのは僕が入部したからだったのか。

嗚呼最悪だ。

よりもよって部活！

一番俺に不必要な要素じゃないか！

嗚呼、俺の安閑とした学園生活よ、さよなら・・・

まあこんな事を考えても仕方ない、と諦める。

日当たりの悪い部屋だ。

「なあ、お前本当にボラ部として何かするのか？」

「よくぞ聞いてくれた！そう、この部活は、名目上ボランティア部

だが、実際は僕の秘密を知っても離れていかない友達を作るという部活なのだ！」

「……」

「なんだい？その微妙そうな顔は。まあいい。今日の活動は部活の勧誘の為にポスターを貼り出すぞ」

「へいへい」

生田があらかじめ作ったポスターを貼り出しその日は生田と分かれた。

翌日、ポスターをよく見ると

端っこにちっこくシャーペンで「友達いない人歓迎」と書いてあった。こんなのにきずくかよ、と心の中でツツコミを入れた。

また憂鬱な一日が始まった。

5 初入部員と恋愛要素（笑）

入部募集のポスターを貼り出した次の日。

俺は今、生田と部室で入部希望者を待っている。

それにしても昨日ポスターを貼ったばっかなのに「部室で新入部員を待つぞ」とか言いやがって、これで入部希望者が来たら俺は生田に・・・

ガラガラッ

「ボランティア部ってここですか」

きたああああ！

「いかにも。ここがボランティア部だが、入部希望者ですか？」

不意打ちで来たのに普通に対応している生田を見て俺はただただ感心した。

「このボランティア部に入るには一つ条件があるのだが」

「はい、なんでしょう」

「その条件なんだけどね、友達がない事なんだ」

そんな奴いないだろ。

「はい、私は全く友達がないのが取り柄です！」

「はい。オツケー」

「うつそ、まじで！」

今気付いたが新入部員が俺の方をチラチラ……いや、10秒に5回は見ている。

気持ち悪い。というか超人技だ。そして何か言いたげだ。

こちらから仕掛けてみようか

「あー」

「私、蠮螋さんのことが好きなんです。この部活に入ったのは、そういう目的もあったからなんです」

「そう。……えっ」

戸惑う俺をよそに舞子は「やだ、言っちゃった」とか言いながら顔を赤らめている。

思考回路がパンクしている。

その言葉を半分ほど理解したころ、意識が飛んでいた。

5 初入部員と恋愛要素（笑）（後書き）

<葛城 舞子>入部届け

性格：明るい

頭：良い方

一言：絶対に、螭螂さんを落とします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5980x/>

儚

2011年11月16日14時54分発行